

## 早期離職者にみられる問題の傾向について

—— ホームルーム担任の行なう進路相談 ——

草 間 馨 子\*

このレポートは、早期離職者（6ヵ月以内）のうち、離職理由が個人の内的問題によると思われる者の問題の傾向を、矢田部ギルフォード性格検査（YGT）と問題傾向予測テスト（EIPC）のプロフィールから検討し、その共通性を探り、それを進路相談の場に生かそうとしたものである。その結果、彼らは、情緒の安定を欠き、社会、学校、家庭への不適応感を持ち、不安感を強く抱いていることが明らかとなり、さらに、これらの問題をもつ生徒が進路決定にあたって動揺していることが明らかになった。

### はじめに

3年生になって間もなく、自分にどんな仕事に向いていると思うとか、自分の適職がわからない、あるいは、自分自身について理解できないとか言ってくる生徒がでてきた。生徒たちはいやおうなしに職業決定について考えを迫られることになる。進路の選択、決定にあたって、個人が自己の適性や特質を的確には握する必要があるとはよく言われることであるが、自己理解ということは、そんなに容易なことではないようである。

2学期のはじめ、職業の選択に関するアンケートをとった。それによると、「自分をよく理解しているか。」という質問に対して、46名中、「理解している」は3名、「だいたい理解している」が14名、「理解しているとは言えない」が29名であった。また、「知りたいこと」に関しては、「自己の特質、適性について」が18名もあった。

半数以上が、自己理解がじゅうぶんであるとは言えず、半数近くが自己をよく知りたいと答えていながら、やがて、職場案内のパンフレットの中で右往左往することになる。

このような生徒たちに対して、HR担任は手をこまねいてはなるまい。情報は進路指導室で与えられる。HR担任は、彼らの自己理解の拡充、深化のための援助者とならねばならず、進路決定までのカウンセリングをおろそかにしてはならない。動揺し、何らかの問題を内にはらみながら、表面には表われて来ない生徒の場合はなおさらである。

少数ではあるが、毎年何名かずつ1年も経ずに職場を去ってゆく生徒がいるが、それは、このような生徒に多いのではなからうか。教師の援助助言が適切であったら……、個々の内に隠された問題を早期に発見し、解消できたら……と思う。

たしかに、生徒ひとりひとりを理解し、受容し、共に考え、適切に指導援助することはむずかしい。

ここでは、早期離職者と内的問題との関連を、毎年本校で行なっているY G性格検査とE I P Cを手がかりとして考察し、そのような傾向をもつ生徒の援助に役立てたいと考えた。

## I 研究の目的

内的問題を理由としての早期離職者に共通する問題の傾向を明らかにするとともに、同じような傾向を示す生徒の進路決定までのカウンセリングを特にたいせつにする。

## II 研究の方法

- 1 対象   ◦昭和45年度、46年度就職者のうち、6か月以内に離職した者10名  
          ◦現3年で問題を持つ生徒2名

- 2 調査   ◦Y G性格検査       ◦E I P C（問題行動予測テスト）

- 3 方法   ひとくちに早期離職といっても、離職理由はさまざまなはずである。急な家庭事情の変化などの外的な理由もあれば、職場での人間関係のまずさなど内的問題によるものもあろう。前者と後者の間には、Y G TやE I P Cの結果に何らかの差異が認められると思われるので、次の順序で考察を進める。

- (1) 理由のいかんにかかわらず、対象者全員のY G性格検査のプロフィールから、それぞれの性格因子の強さについて分析し、問題の認められるグループと認められないグループに分類できるか。それは、前記2つの理由の違いと関連があるか。

- (2) 問題の認められるグループについてE I P Cの分析、検討。

- (3) 内的問題を理由とする早期離職者の問題の傾向

- (4) 現3年生で、(4)と似た傾向を示す生徒のカウンセリング

## III 調査結果の概要

### 1 Y G性格検査に表われた問題の傾向

（表1）は、個人個人の性格因子の強さを比較するために、プロフィールの標準点をそのまま数字で表示したものである。標準点が、個人の性格因子の強さを表わすだけであるのに対しパーセンタイルでは、個人のそれが集団の中での個人の姿としてとらえられるのではないかと思うがパーセンタイルについては細かな数値はつかめないで、巾を持たせた標準点で示した。

さらに、表1により、性格因子をその傾向の強いものから弱いものへ5段階に分類し、個人がどの段階に位置しているか、またグループとしてまとまりが認められるか否かを示したのが（表2）である。

（表2）において、DからNまでは「情緒の安定」に関する因子、OからA gまでは「社会的適応」に関する因子であるが、これら7因子の強、やや強の位置（C O因子では弱、やや弱となる）にひん出する集団がみられ、他の因子にはそれが認められないのは1つの傾向を示しているものと言えよう。

(表1) YG性格検査プロフィール(標準点)

氏名 因子	MY	TK	TS	FK	YH	KS	TH	FI	YM	IK
D	3	2	3	2	5	2	5	5	5	2
C	3	2	3	2	4	2	4	4	4	3
I	3	3	5	3	4	3	4	4	4	4
N	4	2	4	2	4	3	4	3	4	2
O	4	1	3	3	5	2	5	5	5	3
Co	4	2	5	3	4	4	4	3	4	3
Ag	3	2	2	3	4	2	4	2	4	4
G	3	2	3	3	3	3	1	2	1	2
R	3	2	1	3	4	4	3	4	3	4
T	2	3	2	4	3	4	2	3	2	4
A	3	3	2	3	3	3	2	3	2	3
S	2	2	3	4	3	4	2	4	2	3

(1) 情緒の安定について YH, TH, YMの3名は因子のすべてが, F1は3つの因子が, TSは2つの因子, IK, MYは1因子が強, やや強に位置している。

(2) 社会的適応について O因子とAg因子が強, やや強で, CO因子の弱い者がYH, TH, YM。O因子がやや強くCO因子の弱いのはMYであり, TS, IK, FIはどれかI因子が不適応の傾向を示している。

(3) その他の因子 やや強から弱まで分布していて集団は認められないが, G因子とA因子については強, やや強を示す者はいない。

以上から, この10名は「情緒の安定」「社会的適応」の両方に不安定, 不適応を示すYH, TH, YM, YI, TS, IK, MYのグループと, そのような傾向の表われないTK, FK, KSのグループの2つに分類できる。

ところで(表3)は彼らの在

(表3) 在職期間と離職理由

氏名	期間	理由
MY	3か月	職場の人間関係
TK	4 "	家庭の都合
TS	6 "	仕事にあきる
FK	5 "	病気
YH	1 "	寮での人間関係
KS	3 "	仕事にあきる
TH	1 "	適性への疑問
FI	15日	職場の雰囲気
YM	3か月	仕事にあきる
IK	6 "	母の死

職期間と離職理由を示したものであるが, それとこのグループを照らし合わせてみると,

- 情緒の不安定, 社会的不適応を示し, 内的問題を理由としている者, YH, TH, YM, FI, TS, MY。
- 不安定, 不適応を示すが外的理由による者, IK。
- 問題が認められないが, 内的問題を理由とする者, KS。
- 問題が認められず, 理由も外的問題による者, TK, FKとなり, 内的理由から離職した者の大部分はYGTに問題が認められる。

(表2) 性格因子の強さと集団

強さ 因子	強	やや強	普通	やや弱	弱
D	YH FI TH YM		MY TS	FK IK TK	KS
C	YH TH FI YM		IK TS MY	FK TK	KS
I	FI TS	YH TH YM IK	MY FK KS TK		
N	YH TH YM	MY TS	FI KS	IK TK	FK
O	YH FI TH YM	MY	TS IK FK	KS	TK
Co		TK	FI FK IK	YH MY KS YM	TH TS
Ag	YH	TH YM IK	MY FK	FI KS TK TS	
G			YH MY KS TS FK	FI IK	TH YM TK
R		YH FI KS IK	MY TH YM FK	TK	TS
T		KS FK IK	YH FI	MY TH YM TK	TS
A			YH MY FK KS IK TK	TH TS YM	
S		FI TH YM FK	YH KS IK TS	MY	TK

## 2 EIPCに表われた問題の傾向

YG性格検査に、情緒不安定、社会的不適応を示したaグループの6名が、EIPCにはどのような問題傾向として表われているかについて、整理表に表われた傾向を(表4)にまとめた。表でわかるよ

(表4) EIPCプロフィール

問題 氏名	家庭 不適感	学校 不適感	不安 感	抵抗 力	反 抗	自主 我張
YH			P		P'	
TH		P	P'		P	少
YM		P		P'		少
FI		P'		P'		少
TS			P	P'		少
MY		P	P	P'		少

P 要注意 P' 少し要注意

うに、不安感、学校不適応感を強く示し、抵抗力が弱く、問題があっても内に押え、感情が外に発散されない場合が多い。また各プロフィールから

。正義感、公共心はある方だが、責任感が比較的少ない。

。人おじや気にする傾向が強いが、それに近い。

。劣等感まではいかなくても、自信のない態度を示す。

などの傾向がみえた。中に、YG性格検査においては、協調性に欠ける傾向を強く示すが、EIPCでは反対に協調性の強い例が3例あったが、この矛盾は自己の主観的な認識によるものなのか疑問であった。

## 3 内的問題を理由とする早期離職者の問題の傾向

1, 2に見られるとおり、個人の内的問題による早期離職者のほとんどは、YG性格検査やEIPCに問題傾向を示していることが明かである。その特質を列挙すると、

。人おじし気にする傾向が強く、対人関係の中で消極的になりがちである。 。神経質な面がある。

。自信が持てず劣等感にとらわれ疎外感に落ち入りやすい。 。抑うつ性が強く気分がよく変る。

。協調性に欠ける 。主観的で攻撃的な傾向が強いが外面には現われない、などである。これらは、YGTのプロフィールでは「不安定不適応積極型」のB型、「不安定不適応消極型」のE型、また、不安感不適応感の要素の強いB'型、E'型、AE型などであり、EIPCでは「不安感」「学校不適応感」を強く示している。YGTの「不安定」はEIPCの「不安感」となり、YGTの「社会的不適応感」はEIPCでは「学校不適応感」(10例にはなかったが)「家庭不適応感」となる。

このような生徒は、内気でおとなしく消極的であり、問題が表面に表われない目立たない生徒であるのでとかく見過ごされがちであるが、教師の方から積極的に接触していくことが特に必要となる。病める自己からの回復をはかり、これからの人生への明るい意欲を持つ自己へ変容していくためには、まず身近かなホームルーム担任が彼らの心に近づき、理解し、共感し、通じ合う人間関係をつくりあげることにによって可能になるのではない。

## 4 問題の認められる生徒のカウンセリング

この頃では、YGT、EIPCともに問題の認められる生徒のカウンセリングの事例をとり上げた。

事例1, IY ( YGT: 不安定不適応消極型。 EIPC: 家庭不適応感, 特に要注意。  
不安感, 要注意。抵抗力, 少し要注意。問題があっても内に押える。 )

T. 県外希望なのね。I. ええ。T. どんな仕事？ I. まだわからない。T. そう、なにか好きな仕事はないの？ I. 別に。T. 別にない。I. 何だっていいと思っている。……何に向いているんだかわからないもの。T. わからないけど何だっていいの。I. はい、家から出られるなら。T. 家を出たいの？ I. 両親は地元にしろうって言うんだけど。T. でも、あなたは県外へ出たいのね。I. ええ、だって家にいたってちっともおもしろくないもの。T. おもしろくない？ I. うるさくて。T. 両親が？ I. 母はそんなでもないけど……でも……父の言うなりだから。T. そう。I. テレビ見てたってね、そんなくだらんものやめろって切っちゃうの。T. それでおもしろくないの。I. いちいち干渉するから。T. 干渉されると思って……。I. 友だちとキャンプへ行きたいってもね、子どもたちだけではだめだって。T. 心配なのね。I. 自分の考えを押しつけるんです。T. おとうさんの考えをね。I. はい、2年の類型を決める時もね、私、簿記も珠算も苦手ですよ、だから、販売にしたかったけど、経理へ行けて。T. それで経理にしたのね。I. 今度は自分の思うとおりにしたい。T. 県外へ出たいってこと？ I. それもあるけど……T. ほかに何か？ I. ほんと、私、まえから看護婦になりたかったんです。T. そう。I. でも父が看護婦になるなって。T. 反対されたのね。I. 母は最初はいって。T. おとうさんが反対なの？ I. 高次の試験はね、生物があるから……この学校で生物習ってないですよ、それに、試験は普通科の人でもむずかしいって言うし、受けたってどうせ落ちるから、だからね、高田か直江津の病院に勤めながら準看へ行こうと思ったんだけど。T. 勤めながら準看へね。I. パンフレットもらってね、母へ見せたんです。母が父へ見せて……あれ、中学からも行けるですよ、だから。T. ええ。I. 父が反対したんです。中学校から行けるのに高校を出ながら……そしたら母も反対して。T. それで反対したのね。I. だから、県外にするったんだけど。T. ええ。I. これも親の目の届かないところはだめだって。T. じゃ、おとうさんとはまだ意見が一致してないのね。I. はい。T. もう少し話し合ってみた方が良さそうね。

次の面接で彼女は、兄たちには比較的自由にさせている父が、彼女にはやはり賛成してくれず、父自身で縁故を求めて地元の事務関係の職場に就職させようとしていることを話した。「話してもむだだ」と言い、「都会に出て刺激を求めたい」という。彼女は、自分を理解してくれようとせず、一方的に自分の考えだけを押しつけ干渉する存在としてすでに父を遠ざけており、さらに、父の意見に左右されている母にも疎外感を抱いている。「どこでも、どんな職業でもいいから家を出たい」「刺激を求めたい」というのは、父の抑圧を払いのけようとするあがきであり、逃避である。「不安感」も強いが、この父の態度からくる「家庭不適応感」に伴って生じたものであろう。このままの状態では、たとえ、父の意見に従って地元就職したとしても、親子関係は悪化するだけであるし、明るい職業観も希望も持てないから、親と子の意志の疎通と歩みよりが何よりも必要なことであるので、父親に来校してもらい話を聞くことにした。

父親の話は次のようなものであった。「兄ふたりいるが、娘はひとりなので非常にたいせつに思っている。だから心配もし、親の目の届くところで注意もし、配慮もしてやりたい。特に、この子は小さいときから気が弱くて、親のそばでなければ何もできない。仕事についてしまえばどこも同じことで、勤めながら女として必要な洋裁や料理をひととおり習わせて、2、3年たったら結婚をさせたい。それが娘の幸福である。準看から看護婦の資格をとるには年数もかかるし、勤めながら勉強するのでは、習いごとをする時間もあるまい。それに看護婦は労働もきついということだし、耐えられないだろう。」

愛情にあふれ、ひとり娘を心配するあまりのことであるが、過保護、干渉的、支配的な傾向があり、主観的、断定的に判断を下し、子どもを独立した人格として見つめる態度の欠如が見られた。

そこで、子どもには子どもの人生計画があること、親の一方的な意見の押しつけは、たとえそれが子



どものために良かれと思ひ気持ちから出たものであっても、子どもの幸福につながっていくかどうかは疑問であることなどを話し合い、再考を願った。父親の理解が家庭への復帰となり、彼女の「不安感」や「不適応感」を解消するのである。

その後、父親からの連絡はないが、家から通うことを条件に看護婦を許してくれそうな気配という。

事例2 Y・T ( YGT:不安定不適応積極型。 EIPC:学校不適応感, 家庭不適応感, 不安感 )  
 ( 少し要注意, 抵抗力弱い。 )

2年生への進級の際、販売コースを希望していたが、友人が経理コースを選択したために、急に本人も経理コースに変更している。性格から考えて、変化のない仕事は自分には合わないのではないかと、地元での商品管理の仕事を希望していた。10月、地元のK社へ行くことが決定し、書類の準備をしていたが、書類提出日の前日になって急に考えが変わり、関東方面へ行って観光関係の仕事をしたいと申し出て来た。

Y. 書類もう出しましたか。K社には行かないことにしましたから、そのようにしてください。

T. まだ出してないけど、行かないってどうして? Y. K社はあまり良くないって。友だちが、あんたにはあまり向かないんじゃない……って。T. だからやめるの? Y. はい。T. それで? どうするの? Y. 関東方面へ行って観光の仕事がしたいんです。T. ずいぶん急ね。Y. 友だちも東京へ就職するし。T. だから? 観光関係ってガイド? Y. ガイドでもいいし、窓口事務でもいいんです。T. もっと考えてみた方がいいんじゃない? Y. 友だちともじゅうぶん話し合ったの。勤めながらおけいごとをして、3・4年たったら帰ってくるつもりです。

ということでK社をとりやめ、数日後、観光事業のS興業に書類を提出、入社試験を受けたが、帰校後やって来てこれも取り消したいと言う。聞いてみると、寮の施設、設備が悪く気に入らず、「寮がもう少し何とかなったらいいんだけど。」ということであるが、「考えが甘かった。旅で、たったひとりで他人の中にはいって働いていく自信がなくなった。」のが、主な理由のようであった。

コース選択の時にもみられたように、元来、あまり自主性がなく、依頼心も認められるが、両親はすべて本人にまかせきりであり、相談相手になる時間もなく、それで友人のことばに強く影響され、くると考えが変わるのであろう。今度は洋裁学校を希望している。

彼女の問題にもっと早く気づくべきであった。遅きに失した感はあるが、これからでもじっくりと話し合い、理解し、最適の進路を決めさせたいと思う。

## おわりに

YGT, EIPCによるまでもなく、早期離職者の性格は一応予測される。しかし、「あきっぽい」「気が変わり易い」などと簡単に片づけるのではなく、個人の内部に潜む問題の表出されたものとして、その問題の傾向を探り、進路決定に動揺している生徒を発見し、援助に役立てたかった。

資料が散逸していてわずか10例からの考察になってしまった。独断的で早計な見方が多いのではないかと反省している。